

出して、早速これを應用した。さうして「善良なる」サーシヤを力限りに抱きしめて歸つて行つた。歸り際に彼女は下を向きながら、涙を流して、小さな聲で言つた。

「サーシヤ、どうかこのわたしの頼みに就ては誰にも言はないで下さい。でないと又色々な人間が噂の種にしますから。ほんとに誰にも云はないで下さい。では左様なら。あの可愛いライーサさんにわたしからの熱いキッスをしてあげて下さい……サーシヤ、本當にわたしは嬉しいわ」

アントニーナが去ると間も爲く、例に依つて野良猫の様に足を忍ばせ乍ら、大佐がのつそりと現れた。大佐は此頃は殆んどサーシヤの監視役の様な事をやつて居た。「ちよつと五分ばかり」と云つては、毎日何度とい

ふ事なしにサーシヤの所へ来て、そしてサーシヤの色々な用を足したり、色々な忠告も與へたりした。サーシヤが一切の訪問客を追つ拂はないで誰彼の差別なく引見するのは宜しくない、こんな根性の汚ない奴等は頸筋を箒でなぐりつけて、泥水でもぶつかけてやるがいと、彼はサーシヤに呉々も忠告した。彼はまるでサーシヤの後見人にでもなつたかのように事に心配するのであつた。そしてサーシヤの利益を保護し、財産を保護したけれども、彼自身は一文も金の要求をしなかつた。

「サーシヤ、何か用はありませんかね」

「叔父さん、今日は何もありませんよ」

「あゝ然うですか、昨日のサーシヤの頼みは最う済ましましたよ。何んで

も仕立屋のラプーヂは、明日兎に角三着だけ最新流行の巴里風を持って来てと云つて居ました。それから序でに靴屋へも最う一度寄つて急かして来ました。それから坊主の所へ行つて、式の打合せをして来ました。何んでも歌ひ手には随分掛りますねえ、實際あゝ坊主共がぼる様では差し向きあいつ等からして地獄行きですねエへへへ、それでも百三十ルーブルばかり、まけさせましたよ」

「叔父さん、いろく御苦勞でした。有難う」

「滅相な。サーシヤの爲めなら何んでもやりませすよ。しかも喜んでね……あつ、それから今玄關口でアントニーナに會つた。お前を夕食に招待しに来たんだと言つてゐたつて、があゝ狸婆奴旨い事を言つてゐやがる。いく

らお前に頼んだか、この大佐殿はちやんと知つてゐませすよ。」

「いや何も頼まないよ」

大佐は性質の悪いまばたきをして「フン、この俺を嘔す事が出来るものかい——」といふ風をした。

「いや秘密なら秘密で聞くに及ばんが、でもサーシヤ、一度に餘り澤山遣つてはいけないぜ。奴の一家は實際底なし桶だからね……いくら遣つても足りないのだからね……それも然うさ、何んでもかでも貴族風を真似なくては承知しないんだから。名前からしてながくと二重付けにして、クチエーク、オガノフスキーなんて。なんだい、クチエーク。フンドとえらい者に思つてゐやがる。しかもビネーギン家なんかは少しも眼中にないんだ。笑談

ぢやない。クチユークー馬鹿にしてら」

それから一寸黙つて、又喋り出した。

「あゝ然う然う、言ひ忘れてゐたが、昨日實はセルゲイの所へ寄つたがね。お前に一寸お願があると言つてゐたつけ。何んでも『サーシャは自分達を餘り振りむいて呉れん』とか言つてゐたつけ。誰が一々皆を振り向く奴があるものか。馬鹿な奴だ。セルゲイも、それから細君のへオーザも眼に涙を出して、運が悪いとこぼしてゐたつけ。月給が少くないとか、息子に就職口がないとか、若し退職にでもなつたら僅かの恩給では逆も喰つて行けないとか、何んとか言つてゐたつけ。無論少し大袈裟で、急に退職になるなんて事はないにはないが、事實心細いには違ひないね。可哀相なものさ」

「セルゲイ叔父さんは、いくら呉れと云ふのです」

「へオーザは、毛しサーシャが一萬呉れるなら最う二度と頼みはしない。で、それから大人しくその金で老を養ひ、そして餘生をサーシャの爲めに神に祈つて暮すと云つてゐたがね」

「旨い事を言つてゐらア。あの酢の叔母さんは餘り神様好きぢやないよ。いつもけち／＼して神様の代りに金の事ばかり言つて居るぢやないか。それにセルゲイ叔父さんも、氣の小さい人なんだから、相應な金は溜込んで居るよ」

「無論俺も然う思ふがね。兎に角、揃ひも揃つた似合の夫婦で、バタなしでパンを喰ふといふ連中だから……然しまあ／＼遣つた方がよからう。あ

前も知つてゐるだらうが、あの女を腹立たせると危ない藝當をやり兼ねぬから、まあその買収といふ形にして、少し位は遣つた方がいゝと思ふがどうかね」と大佐は變な笑をした。

「それぢや三千ルーブル程遣らうか？」

「それで充分だ。充分過ぎる位だ。お母さんとか兄弟とかなら兎も角、酢の叔母さんなら千枚でも充分な位だ。それは然うとサーシヤ、お前のお母さんの喜びはどうだ。喜んで飛び上つて、天井につかへて頭が痛いといふ様な風だつたよ。五萬ルーブル、外國漫遊、喜ぶのも無理はないさ。今ぢやオリンピダ先生全く幸福の頂上で酒盛りをやつて居る様なものだ……兎に角サーシヤ、お前も澤山の兄弟なんかに贈物をしなくちやならないし、

いくら金があつた所で下手に使つては罰が當るから、いゝ加減に財布の口を締める必要があるよ。殊にワロージヤなんかひどいよ。馬車を乗り廻して、シャンペンを浴び、女を抱いて、一晩で五百ルーブルをファイにしてしまふんだからなあ。最う一文もあるまい。それ所か其上飲み過ぎて二百ルーブルばかり借金をして居る。澤山遣ると却つて毒になる、月に五十ルーブル宛に定めたらどうかね」

それから大佐はビネーギンが着物を着て居る間に、少しばかり又陰口を云ふた。やれワロージヤが餘りマーネチカを追ひ廻すので、デヨーヂが腹を立て、ワロージヤの足を折つてやると頑張つて居るとか、此間ワロージヤがマーネチカと一緒に三頭馬車に乗つて、公園をドライブしてゐたと

か、アントニーナが昨日ワリオチカの所へ行つて「お前はわたしのニックスを取る氣かね」とか言ひ込んで、ひどい騒動が持ち上つたとか、色々な事を話した。

「恰度その場に俺も居たんだよ。そりや實に面白かつたよ。女といふものは随分穢い言葉を使ふもんだね」と、大佐は隠し切れぬ満足を以つて言つた。

ピネーギンは不思議相な面持で聞いた。

「どうして又？」

「どうしてつて、一體あのニックスとか申し奉る男は素的な雄鶏で、雌の臭さへすればフー／＼言ふて追掛ける性質だから仕方ないさ。一昨日もあ

いつはチョコレートを三人前と、花束と、オペラの切符とを持つてワリオチカの所へ行つた。そして親戚の者だから遠慮は要らぬと云つた様な顔をして、濟まし込んでワリオチカの手にキッスをし、握手する時に自分の小指で彼女の小指を特別に力を入れて握つたものだ、エへ、へ、へ、それから後は頗る調子がいゝわけさ。まあ／＼それは言はぬが花だがね。所がどうしたわけかアントニーナがこの事を知つて（實は大佐自身がアントニーナに告げたのであるが、それはおくびにも出さなかつた）早速その翌日ワリオチカの所へ押し掛けた。俺も恰度その時ワリオチカの所で、珈琲と御菓子子の御馳走になつてゐたが、アントニーナも初めは行儀よく坐つて時々遠廻しに嫌味を言ふに過ぎなかつたが、この嫌味が少しもワリオチカに通じ

ないので到頭アントニーナは我慢の緒を切らして、簀から棒に、やれ御前は姪婦だとか、わたしの夫をだまして寝取つてしまつたとか、わたしの夫と待合に行つたとか、ある事ない事總まくりにかくし立て、しまひには大聲を張上げ、眼からは涙をぼろ／＼流して、狂人の様に喚き立てた。俺もほんとにびつくりしたよ。最後にアントニーナは（もう一度でも私のニツクスと構曳して見され、お前のみつともない臀を焼いて呉れるから）と、凄じい事を言つた。流石に我慢強いワリオチカも、自分の臀が焼かれるといふ時に至つて到頭堪へ兼ね（わたしはちつともあなたの夫を誘惑は致しません。又誘惑しやうとも思ひません。たゞ仲よくして清い交際を續けてゐるに過ぎないので。一體あなたの夫を寝取るなんて、そんな事がある

もんですか、あんなブクブク腹の毛だらけの手の人に、どうして心から惚れる事が出来るもんですか。あなたは御自分の夫を世界一の色男の様に仰有るけれども、わたしにとつては、わたしの數ある尊敬者の一人に過ぎませんよへ、、、と斯う言つた様な調子でこれ又盛んにまくし立てる。さうして二人共組打を初めたので、到頭俺も見兼ねて仲裁に入り、どうやらからやら喧嘩だけはあさめた。いや、おかしいやら苦しいやら、それこそ、ゲーテとやらの喜劇以上だつたね」

大佐は猶も意地の悪い笑をつゞけ乍ら、ビネーギンと別れた。さうして下宿の下女のアニエータに「どんな人が尋ねて來ても旦那は留守だと言へ」と一言注意して出て行つた。大佐の此注意あるに拘らず、澤山の人

々がやつて来て、旦那が居らねば歸るまで待つといふ意氣込で、下宿の玄関口に立ちだかつた。こんな譯でビネーギンは、一々これ等の人々に會はぬ譯には行かなかつた。さうしていくら宛の金を施してやつた。不思議な事にはこの數多い訪問者の中には、以前ビネーギンが入つてゐたサークルの人は一人もゐなかつた。若しこれ等の理解ある理想を持つたインテリゲンチヤの青年達が來るならば、十分の援助をしてやらうものをとビネーギンは思つてゐたが、その機會は遂に來なかつた。彼は心の中で淋しさを感ぜないわけには行かなかつた。

或時彼は、曾て彼が好いた事のある、可愛い娘のオリガ、ニコラエウナに途中で逢つた。彼は驚いて間近の商店に隠れ、そして彼女を通り過ぎさし

た。彼は彼女に對して非常な恥しさを感ぜた。と云ふのは、彼は曾て自分の姪から、オリガ、ニコラエウナが彼の結婚を悪い行爲だと言つたといふ事を聞いてゐたからである。又彼の曾ての親友であつた文士ウグリユーモフは、今は肺病で死かゝつて居るに拘らず、ビネーギンに金の援助を受くる事を喜ばなかつた。ビネーギンは物靜かな夜中にフト眼を醒して、このウグリユーモフを思ひ出した。彼と一緒にやつた雑誌が賣れないので、二人共ズナイメン街の地下室に凍死せんばかりの状態にゐた時の事を思ひ出した。で、彼はその翌日自からウグリユーモフを尋ねて、金を與えやうとした。彼は臆病さうに口を切つた。

「僕は今は金持になつて、大抵の金なら自由になるんだ。僕ほどんな事で

も君の爲めに盡して、昔の君の努力に感謝したいと思ふ……」

「さう／＼君は金持になつたつてね！ それは大變に結構な事だ。何んでも金持の御令嬢と結婚するといふぢやないか」とウグリユーモフは苦し氣な咳をした後で、かすれた聲で斯う言つた。

「どうかね、僕はいくらでも金を出すが、一つクリミヤなり、コーカサスなり、それから御好みならばドイツの温泉へなり行つては？ さうして、ゆつくり療治して元氣を恢復してから、君が多年志してゐたあの大著作を完成しては？」と言ひ乍ら、ビネーギンは片手をポケットに入れかけた。

ウグリユーモフは、ビネーギンの好意を感謝したが、金の援助は斷つた。「最う今ぢや僕も金には困らんよ……いゝ仕事をみつけたんでね。當分僕

も飯の喰ひはぐれはないよ。また此次、困つた時に頼むとしやう」

ビネーギンは、ウグリユーモフの言葉が明かに嘘である事を看取つた。ウグリユーモフは彼を心底から輕蔑して居るのだが、たゞその輕蔑を、あらはに出さない爲めに、あんな口實を作つたのだと思つた。彼はそこ／＼とウグリユーモフの下宿を出た。

「馬鹿な奴だ。ドンキホーテとはあんな奴の事を言ふのだらう。理想理想をふりかざして、擧句の果てには血反吐を吐いて死んだ方がいゝのだらう。おとなしく金を貰つて大著作をやればそれだけ世の中の爲めに、なるんぢやないか」と彼は突然心の中に起きた憎惡の念に驅られてしまつた。

大きくはないが、眼も眩ゆいばかりに飾られた寺には、ビネーギンの澤山の親類や友人が美々しく着飾つて、ゴツタ返して居た。今日はビネーギンの盛大な結婚式が行はれるといふので、オリンピダ・ワシリエフナは自分の知つて居る限りの人々へ悉く招待状を出したのだから、混雑するのも無理はない。誰だつて御馳走になるのはいやな事ではないから。オリンピダは寺の玄關に立つて、来る人毎に挨拶した。男の來た時はさうでもなかつたが女の來た時は千羽の雀が一緒に立つ様に喧しかつた。髪が美しいとか、リボンの色がよいとか、裾の銀絲が光るとか、取るに足らぬ事が一々挨拶の中に雜ぜられた。アントニーナとまだ仲直りせぬワリオチカは、貯金の半分を引出して最新流行の着物を作つた。彼女は、この着物であの

生意氣なアントニーナの度膽を抜いてやらう、あの婆奴よもやこんな流行のある事を知るまいと内心得意で、態とアントニーナの目に附く所で男達に愛嬌をふりまいた。彼女のキャツ／＼といふ笑聲は、時としては他の總ての客の聲を壓することもあつた。アントニーナも今日は、ビネーギンから此間借りた金で作つた素晴らしい派手なものを著てゐたが、どうも肩から腰へかけての線に淋しい所があつて、姥櫻の悲哀が浮んで居た。レノチカは紫色の天鵝絨の着物を着、絹靴をてか／＼光らして馳け廻つてゐた。例の酢の叔母さんは、あんな小供の時分から贅澤にさせてはレノチカも祿な女になるまい、あれも屹度サーシャから貰つた金で作つたのであらうが、などと隅の方で一人佛頂面をしてゐた。どうした拍子か、ワリオ

チカとアントニーナがバツタリ出會つた。すると二人は勿論握手もせず、キツスもせず、傲然と肩を張り合ふて、敵同志のやうにすれ違つた。お互に態と眼を細くしたにも拘らず、その細い眼でも互に相手方の衣裳に注意することを忘れなかつた。アントニーナはワリオチカの衣裳を見て、まるで淫賣婦だと心に思つた。ワリオチカは又、大分金をかけたやうだがどうも引き立たぬ、やはり年寄つたからだわいと思つた。ワリオチカはゼーニチカの側に寄つた時、態とアントニーナに聞える聲で（御覽なさい、あの袖袂の縫目を）と言つた。

間もなく合唱が始まつた。皆は聲をひそめた。皆の眼は戸口の所へ一齊に向けられた。すると金モールの禮服に、同じく金モールの綬を帯びて、

胸のあたりに大きな勳章をつけたニックスが、如何にも澄した顔をして、花嫁の手を執つて入つて來た。花嫁の小さい、ゴツ／＼した、そして腰から下の嫌に肥つた、不恰好な姿が着物が美しい爲めに一層醜く見えた。餘りに人の多勢なのに驚いた彼女は、恰もこれ等の物好きな人々の前に自分の醜さを曝す悲しさがヒシ／＼と感ぜられたかの如く、眞赤になつた、彼女が頭を低く垂れて、そして人々を見まいとした。祭壇の前で、すらりとした美しい姿の、興奮の餘り稍上氣して頬を赤くしてゐるビネーギンと並んだ時に彼女はホットト安心した。花嫁と花婿は握手をした。ビネーギンは何か花嫁の耳に囁いた。彼女は嬉しさうにニッコリ笑つた。

いよ／＼式が始まつた。ライーサは眞面目な顔をして畏まつた。肩を窄

めて俯向勝ちに、石の様に堅くなり、時々胸に十字を切つた。ビネーギンは何かしら、そわ／＼してゐた……

出席者の中に、人一倍丈の高い上品な老婆がゐた。彼女は展々胸に十字を切つて、二人の結婚の將來を祝福した。これはライーサの伯母さんであつた。この世でライーサを愛するたゞ一人の人であつた。彼女は無學であつたが然し伶俐な女で、ビネーギンのライーサに對する愛を信じなかつたが、ライーサを愛する餘りそれを口外する事を憚り、黙つて財産の管理權をビネーギンに譲つてしまつたのである。彼女は心の中で、たとへビネーギンがライーサを愛しないにしても、この財産を貰ふ感謝の念からでも、自分の愛する姪を見捨てる事はあるまいと思つてゐた。

兎角する中に式は濟んだ。花嫁花婿はキッスを取り交した。それからお客さん達の挨拶が始まつた。寺から馬車の長い行列が出た。この行列は、新婚の二人が外國へ旅行するまでの二週間を暮すべき、ライーサの邸宅へと着いた。そして此處で盛んな宴會が開かれ、再び祝福の挨拶が繰返され、シヤムバンがボンボン抜かれた。南の方から態々取寄せた果物、菓菓子、ボン／＼等が次から次へと飛び交つた。ビネーギンの親類達は生れて初めてのこの美しい席の中で、すつかり上氣してしまひ、狐につままれた恰好であつた。部屋に飾りつけた油繪、青銅の彫刻、其他の裝飾物にも客の眼は奪はれた。白いテーブル掛に輝く食卓には、ペテルブルグ一流の料理人が丹精を凝した料理が並べられてあつた。

宴會の終る時分になると、女のお客さん達は、この大廣間から抜けて、オリンピックダの手捌きによつて飾りつけられた新婚夫婦の寢室を見に行つたさうして其處に漲つて居る温かさと、甘さと、いゝ香に茫としてしまひ、心地よい巢だと言ひ合つた。

到頭十二時になつた。お客さん達は皆歸つた。ライーサの伯母さんは、ずつと以前に、自分の室へ引き上げてしまつてゐた。後は二人ぎりになつた。

「それにしても、まづい女だなあ！」

ビネーギンはライーサの姿にしげく見入り乍ら、心の中で斯う言つた……

ライーサはその穩かな、愛に充ちた眼で、恥かし氣に、しかし幸福にすつかり酔ふた様子で、ぢつと夫の眼に見入つた。そして恐る／＼自分の手を、ビネーギンの手の上に載せた……

「實に僕は幸福です……あなたが可愛ゆくて……」ビネーギンは斯う云ひ乍ら、彼女を堅く抱きしめて、彼女の口に熱いキッスをした。(終)

大正十一年七月二十日印刷
大正十一年七月二十五日發行

天才と或女との結婚

定價金壹圓

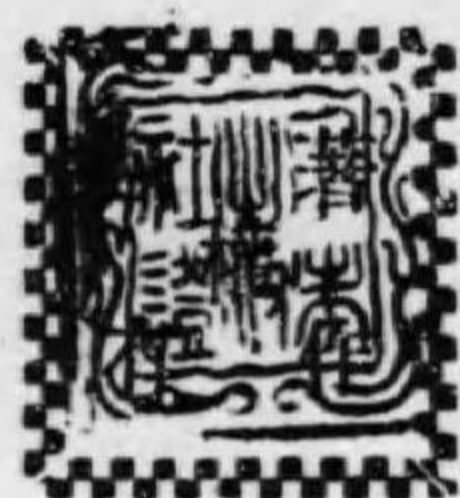
著者 島野三郎

東京市麹町區麹町三丁目四番地

發行者 土屋泰次郎

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

印刷者 吉田松次



發行所

東京市麹町區麹町三丁目四番地

丁未出版社

電話九段六六〇番・振替東京七八四七番

秀英舎一工場 株式會社

506

188

終